

國學院大學学術情報リポジトリ

出版物紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001554

出版物紹介

藤井修平『科学で宗教が解明できるか—進化生物学・認知科学に基づく宗教理論の誕生—』

(勁草書房、2023年1月)

内容紹介

本書は、進化生物学や認知科学の知見を用いた宗教理論である「科学的宗教理論」が21世紀に登場したことが、宗教研究の分野にいかなる展開をもたらすかという点について、その方法論、成立経緯、批判および思想的役割の分析を通して解明を試みたものである。

本書では科学的宗教理論に対し、既存の宗教研究との関連(第1章)、進化生物学と認知科学における背景と理論の展開(第2・3章)、それに対する方法論的議論と批判(第4章)、関連する宗教思想(第5・6章)という複数の視点からアプローチし、科学的宗教理論はどのような分野の知見を参照しているか、それは宗教をどのように捉えているか、既存の研究とはいかなる点が異なるか、その登場にはどんな社会的背景があるかといった問いに答えている。



櫻井義秀『東アジア宗教のかたち—比較宗教社会学への招待—』

(法蔵館、2022年6月)

内容紹介

本書は、宗教に「かたち」を見いだし、近代化という共通の経験やそのプロセスの違いによる地域ごとの差異に着目して比較することで、より広い視点から東アジアの宗教文化を論じたものである。序章において、比較宗教社会学とは何か、また、その視点と手法が述べられ、本書の意図・立場が明らかにされる。2章以降では、タイ、中国、台湾、チベット、香港、韓国、日本における仏教をはじめとする伝統宗教や新宗教、民俗宗教が、政治体制との関係や近年の動向にも触れながら俯瞰される。長年にわたる現地調査での経験が惜しみなく盛り込まれ、著者の視点からみる宗教文化論が平易な語り口で展開される点が本書の特徴であろう。巻末には、付録として「アジアの宗教を読む20冊」が収録されている。



港千尋・平藤喜久子編『〈聖なるもの〉を撮る—宗教学者と写真家による共創と対話—』

(山川出版社、2023年8月)

内容紹介

本書は、祭り・祈り・聖地・教祖などの〈聖なるもの〉に取り組み、撮影してきた宗教学者と写真家総勢14名が、それぞれの立場からどのように〈聖なるもの〉と向き合っているかを論じた画期的な試みである。写真家が写真を撮ることと研究者が文章を書くことには重なりあうものがあると編者は述べる。

第一部・第二部では、様々な聖なる場所・人物への向き合い方が語られ、第三部では、柳田國男や岡本太郎など写真と積極的に関わった先人たちのまなざしを取り上げられる。スマホが普及し、誰もが簡単に撮影・発信できる現在、〈聖なるもの〉を撮り、それを見ること・見せることはどのような意味をもつのか。研究者が持ち寄った「失敗写真」を題材に写真家の技術を学ぶ対話も収録されている。



飯倉義之監修、いとうみちろう絵『はじめてのオニずかん』

(スタジオオタッククリエイティブ、2022年9月)

内容紹介

本書は古今東西のオニを取り上げた、子供向けのずかんえほんである。子供でも読みやすい平易な文章に、迫力あるフルカラーのイラストが多数入っており眺めるだけでも楽しい。しかしただ楽しいだけに終わらず、説明を読んでもみるとその専門的な内容に驚く。まず冒頭の「オニって何だろう？」ではオニが歴史的にかなり広い意味で多彩な描かれ方をしていたこと、病気や自然災害など“おそろしいもの”をオニと呼んでいたことを説明する。以下、「大江山のオニ」「仏教・神界のオニ」「地獄のオニ」「日本各地に伝わるオニ」「物語のオニ」「外国のオニ」と、有名な説話や祭りに登場するものなど様々な出典をもつオニを多数取り上げる。コラムでは陰陽五行説など背景となる思想の解説まで盛り込む力の入れようだ。本書を読んだ子供たちが数十年後、妖怪の研究者となることもあるのかもしれない。

